パパ ママ バイバイ

早乙女勝元
詩＝門倉 訣
画＝鈴木たくま

草土文化

早乙女 勝元（さおとめ かつもと）

東京足立区の生まれ。働きながら作家になる。東京空襲を記録する会の推進力となり、同会は第22回菊池寛賞を受賞。ＪＣＪ奨励賞受賞。日本文芸家協会会員。

作品は『早乙女勝元選集 全12巻』（理論社）『わが街角』（5巻 新潮社）『東京大空襲』（岩波新書）児童文学に絵本『負元物語』（理論社）『ベトナムのダーちゃん』（童心社）またエッセイ集『人間として』『人間らしく』『共働きはラクじゃないヨ』『わが子わが夢』（以上、草土文化）など多数。

作＝早乙女勝元　画＝鈴木琢磨　詩＝門倉訣

パパ　ママ　バイバイ

発行日　1979年3月20日　初版
　　1979年4月20日　2刷

発行者＝田辺徹

印刷所＝光陽印刷株式会社　製本所＝小高製本

発行所＝株式会社草土文化
東京都千代田区五番町10-6 〒102
ＴＥＬ03-264-0631 振替東京5-46122

書籍コード 8793-7720-4221

パパ ママ バイバイ

早乙女勝元
詩・門倉訣
画・鈴木たくま

「どなたか、皮膚をください。大やけどをした妻のために、あなたの、健康な皮膚をわけてください！」

朝くばられてきた新聞に、そんな大見出しの記事を見つけたのは、ことし（昭和五十三年）桜の花のほころびかけたころだったと、おぼえています。

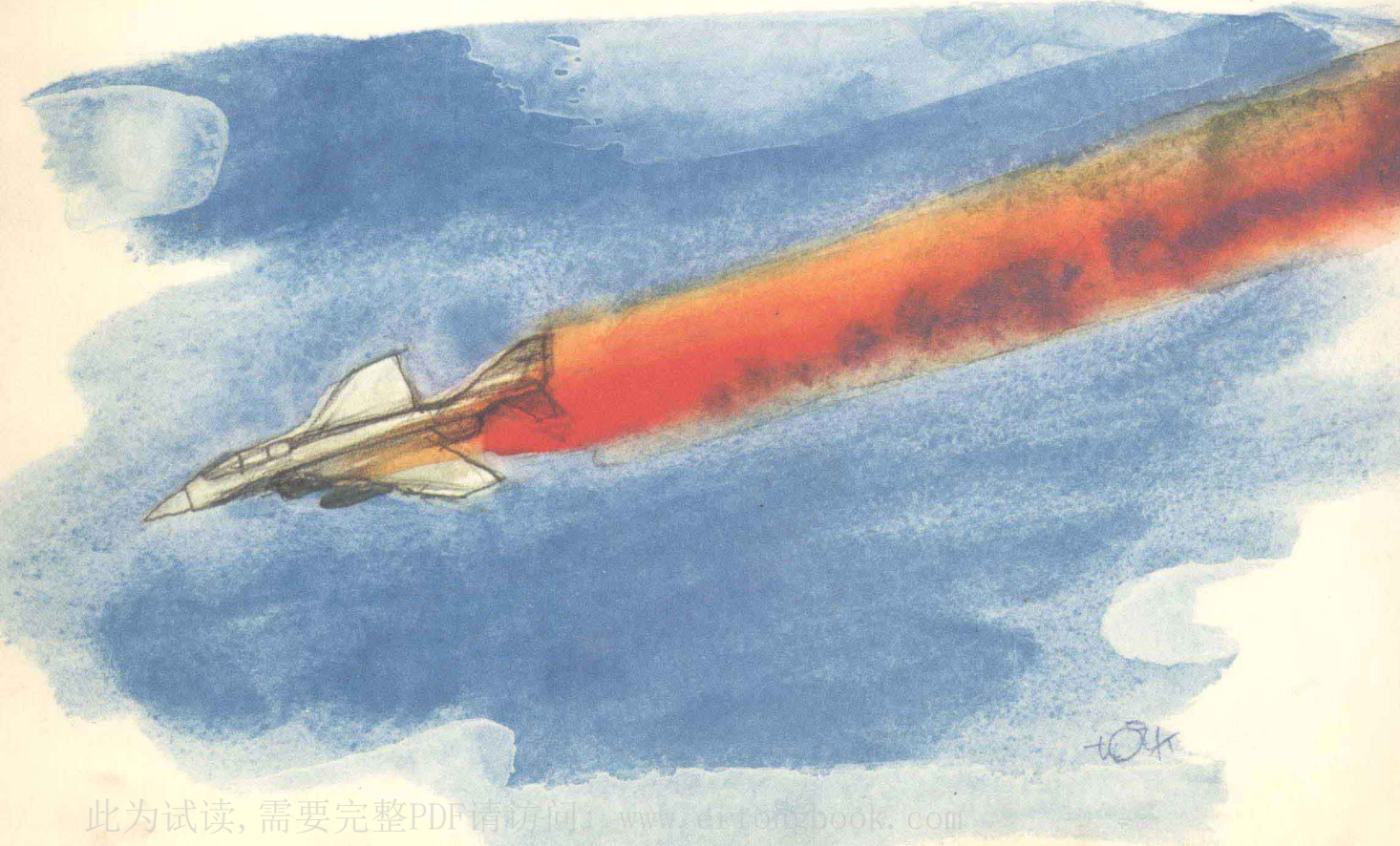
ぼくは、どきんと胸が一つ大きくうつのを感じました。目がくらむような気がしました。

ああ、あのおかあさんは、こんなにぐあい悪くなってしまったのか……と思うと、こまかい記事を読むのが、なんだか、こわいみたいです。

でも、読まずにはいられません。

「横浜市緑区にある昭和大学藤が丘病院で……」

やっぱり、そうです。横浜の緑区ときい



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ただけで、ぼくには、ぴんときます。あのおかあさんです。林和枝さんに、まちがいありません。

林和枝さんは、からだじゅうの皮膚を八割ちかくも焼かれてしまったのです。人間のからだは、その皮膚の半分がなくなってしまうと、生命があぶないといわれています。やけどの部分から、からだじゅうの栄養が、水分となってにじみ出てしまうからです。皮をむきっぱなしにした果物は、たちまちひからびてしまう、それとおなじです。おまけに、いろいろな病気にうつりやすくなるのです。

ですから、和枝さんは、全身に白いほうたいを巻かれて、ベッドに寝たっきり。たしか、この一月下旬にも、たいそう具合悪くなって、もうだめかとみなを心配させましたが、だれもが信じられないような生命力で、あぶないところを乗りきりました。

それでも、このままでは、生きていかれません。

三月三十日、昭和大学で、和枝さんの手術がおこなわれました。よその人の皮膚を一部分切りとって、やけどの部分に縫いつけるのです。

皮膚移植手術です。

まず、ご主人の一久さんが、ついで、和枝さんのおとうさんが、そして、親類の人たちが……。

でも、からだのほとんどの皮膚を焼かれてしまったのですから、これくらいでたりるはずはありません。いますぐ、もっとどっさり必要なのです。どうしたらよいのだろう、どうしたら……思いあまった一久さんは、とうとう新聞を通じて、大ぜいの人たちにうったえたというわけなのです。

「どなたか、皮膚をおわけください。大やけどをした妻に……」

「ああ」

ぼくは、ため息をつきました。

さしあげる皮膚は、厚さ〇・一ミリ、五センチ四方と書いてありますから、名刺よりもちょっと小さめくらいの大きさでしょう。太ももから、デルマトームという器具で取るのだそうです。でも、かんたんなことではありません。血液をとるのだって、けっしていい気持はしないものです。それが皮膚となったら、どうでしょうか。

これが、ほかならぬ親や兄弟や、わが子の生命があぶないというのなら話は別ですが、まだ一度も会ったこともない、見ずしらずのおかあさんなのです。

しかも、今の世の中は、どちらかといえば、〃おれはおれオマエはオマエ〃で、他人のことなどかまっちゃおれないよ、

という人たちが多くなってきました。たとえば、となりのアパートのおじいさんが、病気で死んでミイラになっていても、何カ月も発見されないという時代なのです。東京のある団地からは、飛び降り自殺者が、三十五人も出るという異常な時代なのです。社会を吹いている風は、とても冷たいのです。

どなたか皮膚を……といっても、ほいきた、と応じてくれる人が、さて何人いることでしょう。

でも、見ずしらずの母親、と書きましたが、和枝さんは、自分のふしまつやなにかで、大やけどをしたのではなかったのです。

そのとき、林和枝さんは二十七歳。

ユー君と、ヤス君のおかあさんです。

ゴレンジャーの仮面がお気に入りの裕一郎君は三歳で、ようやく、かたことのいえるようになった康弘君は、まだお誕生をすぎたばかりの一歳でした。

ご主人の一久さんは、農業のお仕事をしています。

横浜の緑区の児童公園のそばの家には、ほかにおばあちゃんと、一久さんの妹さんの早苗さんがいて、とてもにぎやかな六人家族です。でも、その中心はなんといっても、ユー君とヤス君で、二人はいつも飛んだりはねたり、ころんだり、よくあそびよく食べて、日増しに大きくなっていきます。いたずらざかりの、やんちゃな兄弟とともに、明るくすこやかな毎日は、これからもずっとつづくかと思えました。

试读结束：需要全本PDF请访问：www.ertongbook.com

ところが、だれもが思いもよらぬ、おそろしい事件が、この林さん一家におそいかかったのです。

ゴーッというぶきみな音とともに、とつぜんばかでかい火の玉が、空から降ってきました。

オレンジ色の炎を吹きながら、まっしぐらに地面にささりこんできたかと思ううち、コンクリートの電柱を一瞬にへし折り、アスファルトの道路をえぐって、グワーンと大地に墜落したのは、アメリカのファントム・ジェット戦術偵察機でした。昭和五十二年九月二十七日、午後一時すぎのことです。

このあたりは、高台になっていて、これから人家がどっさり建つだろうという静かな場所で、児童公園もできあがり、宅地づくりの人たちが、あちらこちらで、水道管の穴を掘ったり、土を運んだりして、汗まみれに働いていました。その人たちも、通行人も、逃げるゆとりなく、みな耳をふさいで、とっさに地べたに伏せたのです。

大音響とともに、地面がガクガクと揺れました。

長さ十八メートル、重さ二十六トンものジェット機が、最大限のスピードで激突し、大爆発したのですから、たまったものではありません。機体は翼も胴体も、ことごとくジュラルミンのかけらとなって空中高く舞いあがり、無数の火の玉となって降りそそぎました。エンジンの一つは、なんと九十メートルも吹っとび、林さんの家には翼の一部が飛びこんできました。

しかも、火の玉は、降ってくるばかりではなかったのです。

ドラムカン六十五本にもおよぶ満タンのジェット燃料は、墜落地点から扇のようにひろがって、

ガスバーナーの炎のように地をなめ、樹木をかんで走り、火炎帯となって、どっと近所の家々におそいかかったのでした。

宅地づくりに働いていた人たちは、思わず顔をあげました。

もうもうと立ちあがるキノコ形の黒い煙の下に、いたるところ、真っ赤な炎がいきもののように飛びかい、公園の樹木も、柵も、そして家も、メキメキパキパキシューシューと、すさまじい音を立てています。

燃えさかっているのです。

空に二つのパラシュートが……。ファントム機のアメリカ兵にちがいありません。

でも、いまは空中にいるパイロットよりも、燃えさかる家の中にいる人たちを、すぐ助けなければなりません。

「炎の中から、奥さんらしい人と、二十五、六歳くらいの娘さんが、赤ちゃんを抱

tax

え、悲鳴をあげて飛び出してきました。上着は黒こげ、下着がべったり肌にひっついているんです。こめかみからは血が噴きだして……」

「〃たすけてッ！〃とさけんで、また女の人がかけてきました。顔は火ぶくれで、ふだんの二倍ほどにもはれあがり、髪は焼けちぢれ、上着はボロボロ、わずかに下着がついているくらいのものでした」

「全身猛火にあぶられたその人は、衣服は焼け焦げ、緑色のスカートは裏地のナイロンがとけてボロボロ、爆発のショックでふっとんだらしい置時計の裏ぶたが、とけたスカートの腰のあたりにはりつき、髪の毛もちりちりに燃えて……」

現場に働いていた人たちは、そういっています。

その人たちも、爆風ではねとばされたり、傷をうけたりしていましたが、外にいて見はらしがきましたので、とっさに難をさけられたのです。でも、自分のことはかまっていられません。火炎地獄の中から這い出してきた人は、一分一秒をあらそうのです。火ぶくれだらけの女の人を助けて、すぐさま、車で病院へ向おうとしたとき、路上に血だらけでたおれている男の子が……。

「両手両足はもとより、からだじゅうの皮がむけて、血のかたまりとおなじでした。もう声を出す力もないほどでした……」

それが、小さなヤス君だったのです。

そのとき頭上には、ぶるんぶるんとエンジンのうなりをひびかせて、一機のヘリコプターが飛びまわっていました。海上自衛隊の救難ヘリでした。

いちはやく情報を知って、火ぶくれ血みどろの人たちを助けにきてくれたものとばかり、だれしも思いました。重傷の人たちの手当ては、早ければ早いほどよいのです。どんなケガでもそうですが、とくにジェット燃料によるやけどは、皮膚だけでなく、筋肉まで焼いてしまいますから、その治療には、はじめの五、六時間がとても大事なのです。それにしても、事故のおきたとたんに、救助のヘリコプターがやってきたのは、ちょっと、手ぎわがよすぎるというものです。

やがて、このヘリコプターが、だれの命令で、なんのためにやってきたのかがあきらかになりました。

救助は救助でも、自衛隊のヘリが助けたのは、パラシュートを引きずって、ゆったり歩いてきた二人のアメリカ兵だったのです。

「サンキュー」

よくきてくれた、といわんばかりです。

アメリカ兵を乗せたヘリは、地べたにうずくまっている火ぶくれの人や、まだ燃えさかる樹木や人家にはおかまいなしに、ワッサワッサとプロペラを回転させ、またたくまに空高く舞いあがって、消えてしまいました。

その直後にきたアメリカ軍ヘリの兵士たちも、墜落現場のひみつを知られまいと人びとを閉め出すことばかりで、被害を受けた人には、なんの手もさしのべようとしませんでした。まもなく日本の警察と、アメリカ海兵隊とがやってきて、現場の調査がはじまりましたが、警官はほとんど手出しができないまま、アメリカがわは現場写真をうつしたあと、事故の原因をさぐる決め手ともいう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com